

# ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 最終評価実施報告書

## 1 はじめに（最終評価の目的等）

ヒューマンライフィノベーション開発研究機構に設置した2つの研究所（ヒューマンライフィノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）の研究プロジェクトや事業などについて、全体構想に基づき、6年間（2016年度～2021年度）の進捗状況を確認の上、最終的な評価を行った。特に、令和元年度に実施した中間評価の結果を受け、研究プロジェクト、事業内容、組織実施体制等の見直し・改善が適切に遂行されているかを確認・評価した。

また、今回の最終評価に際しては、評価委員会（午後）に先立ち、これまでの研究・事業の成果に関する国際シンポジウム（午前）をオンラインで開催した。

各委員の先生方におかれては、年度末で多忙のなかご協力頂き、この場を借りて感謝申し上げます。

今回の最終評価により、第3期中期目標・計画を達成するとともに、「ヒューマンライフィノベーション開発研究機構」が自他共に認める国際研究拠点としての基盤を固め、第4期に向けたさらなる発展と進化をめざしたい。

## 2 機構について

お茶の水女子大学は、第3期中期目標期間（2016年度～2021年度）において、「本学の特色ある研究を活発に推進し、研究レベルの高度化と先進的な研究分野を開拓して学術と社会に貢献するために、新たな研究組織を構築し、国際的な研究拠点を形成する。第3期中期目標期間には、特に、人の発達過程における様々な課題を解決するための研究と、人が一生を通じて心身ともに健やかに暮らすための研究を推進し、その成果を社会に向けて発信する。」ことを目標に掲げ、本機構はこれに基づき、2016年4月に設置された。

本機構の下には、「ヒューマンライフィノベーション研究所」と「人間発達教育科学研究所」が設置され、それぞれ本学の強みを活かして、生命科学・生活科学による身体的・環境的側面ならびに人間発達科学・教育科学による精神的・社会的側面から、国内外の研究機関や企業と連携することによって、「からだ」と「こころ」の両面からの研究を推進している。また、幼児期から高齢期までの人の発達段階に即して、人が健康で心豊かに過ごし生活環境を向上させる革新的解決方策を創出し、その成果を社会に向け発信することを目標としている。

## 3 評価の方法等

最終評価の実施に当たっては、本学の基幹研究院長のもと、3名の外部委員を含む計6名の委員会構成員により、あらかじめ配布・送付された最終報告書による書面評価により行われた。

最終報告書は、機構及び各研究所の概要、構成などの資料に加え、2016年4月から2021年12月までの各研究所の研究業績、シンポジウム等の活動実績等の計500ページを超える資料

(全3部)を各委員によりご確認いただき、1)機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価、2)融合研究に関する意見、提言、3)今後の課題についての提言、4)その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の4つの観点でのコメントにより評価をいただいた。

また、評価委員会に先立ち開催された「国際シンポジウム」にもご参加頂き、各研究所の主要な研究プロジェクトや事業についても直接ご意見ご助言を賜りご評価いただいた。

新型コロナ感染防止対策としてオンライン(zoom)で開催された評価委員会の議事進行については以下のとおりである。

#### <ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 令和3年度最終評価委員会>

【開催日】2022年3月14日(月) 14:00～17:00

【開催形式】オンライン(zoom)

【議事進行】

- 14:00-14:05 委員長挨拶、本日の議事進行説明
- 14:05-14:40 ヒューマンライフィノベーション開発研究機構概要説明等
- 14:05-14:20 機構の概要説明、取組の全体構想、平成28年度～令和3年度取組実績についての説明 (石井クンツ 昌子機構長)
- 14:20-14:30 ヒューマンライフィノベーション研究所 成果概要説明 (藤原 葉子研究所長)
- 14:30-14:40 人間発達教育科学研究所 成果概要説明 (大森 美香研究所長)
- 14:40-14:50 休憩
- 14:50-15:50 機構の個別研究内容説明(6人×10分)  
宮本 泰則教授、森光 康次郎教授、千葉 和義教授  
内海 緒香特任講師、上原 泉准教授、今泉 修助教
- 15:50-16:35 評価委員による質疑、コメント、意見交換
- 16:35-16:50 評価委員による協議(打合せ)
- 16:50-17:00 まとめ、今後のスケジュール確認

#### 4 評価委員からのコメント概要

各評価委員からは、計6年間の研究・活動実績に対し、概ね肯定的なコメントをいただいた。

また、今後の課題や展開について、さまざまな視点からの指摘や提言をいただいた。

各評価委員から寄せられたコメントの概要は以下のとおりである。

(※各委員のコメントは、事務局により表現の統一などによる加筆を行っている。)

##### 1) 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価

- ヒューマンライフィノベーション研究所は、多額の研究費を学外より獲得し、盛んな研究活動を展開していることが評価できる。人間発達教育科学研究所は、むしろ目の前にいる子どもや心的疾患を持つ人々のために尽力することにおいて重要な働きをしていることを評価すべきと考える。小冊子「Q&Aシリーズ」の刊行についても、特に精神医学的内容の巻が多く読まれているのは、こうした事柄について、専門家集団により信頼できる情報

を出している機関が少ないためであろうが、それは社会的な地位の高さを物語っていると考えられる。

- ・機構の目的である教育研究拠点の形成のために、ユニークかつ先端的な研究が行われており、学生の発表数や Q&A 集の作成・配布など教育に対しても貢献されている点は高く評価できる。
- ・各研究所のパフォーマンスについては上述のように個別の研究遂行については高く評価できる。ただし目的にあるように「国際研究拠点の構築」ということについては、少々具体策に乏しい感がある。海外研究者を招へいしてのシンポジウムなどの企画を行っていることは評価できるが、実質的な「国際研究拠点」としての地位を確立するには、海外から参加発表の応募が積極的にあるようなテーマの国際ワークショップやシンポジウムなどの企画が立てられることが期待される。
- ・期間中、HLI 研究所と人間発達教育科学研究所では、各年度、約 50～150 件の論文（うち半数は英文による）、約 10～70 件の国際学会での発表や国際会議での講演が成果として出されており、研究・開発に関わる高い水準での活動が行われていると判断できる。期間を通して約 90 件にのぼるシンポジウム等が開催され、先端的な研究推進とアウトリーチ/ディセミネーションの両方が意欲的に行われており、さらに、期間を通して受託研究 36 件、受託事業 38 件、共同研究 82 件に加え、文理融合的な研究活動が行われるなど、国内外の研究機関や企業との連携や社会に向けた発信という目標に向けた活動も行われている。特に、6 冊の Q&A シリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており（ダウンロード数などから）、これらのことから、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると判断できる。
- ・Ⅰ期（2016～2017 年）は、ヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI）と人間発達教育研究所（IEHD）のどちらも、それまでに行ってきた研究・活動から機構の目的に沿う内容のシンポジウム・研究会・セミナーなどの開催が中心の時期ととらえることができると思われる。機構としての特筆すべき活動は乏しいといわざるを得ないが、異分野を融合した研究組織の黎明期の状況としては特に問題とされるものではないと考える。Ⅱ期（2018～2019 年）は、IHLI では研究部門の再構築や研究プロジェクトの立ち上げ、IEHD では大規模調査・縦断調査の実施や若手への研究推進事業の実施など、2 研究所とも機構としての活動を意識した研究活動が活発化し、機構の目的である「心身の健康と生活環境の向上」に資する研究発表が飛躍的に増加し、特に英文論文数が大きく増えている点は特筆に値すると思われる。Ⅲ期（2020～2021 年）は、2 研究所が協働しての活動が開始された時期といえる。コロナ禍もあり、協働活動の多くは 2021 年度の実施となっているが、状況を考えると仕方がないことと思われる。むしろ、コロナ禍で突然の遠隔授業等の変な教育を実施している中、複数の協働活動を行い、大型研究費申請を行うなど、2 研究所ともよく活動したと評価される。以上、機構に設置された 2 研究所は、機構の目的を踏まえた活動を 6 年間実施したと判断する。一方で、2 研究所が協働しての研究活動は緒に就いたところとも言え、その点は、今後の機構の活動に期待したい。
- ・社会構造の変化に伴う社会的課題の解決を目的とする本機構は、理系主体であるヒューマンライフイノベーション研究所と、文系主体である人間発達教育科学研究所との協奏的研究によりその目的を果たしていると言える。人数が少ないながらも、様々な分野の研究者を擁するお茶の水女子大学の特徴を生かして、多方面からのアプローチが試みられており、

一つ一つの研究についても興味深く、ユニークな成果を生み出している。多くのシンポジウム等のイベントも行われており、活発な活動であったことが見て取れる。

- ・2020年の中間評価で、「お茶の水女子大学ならではの」の観点から、「すべての女性がしあわせな一生を送れる未来づくり」といった、高い境地を目指してほしい、と提言した。昨今、健康寿命に加え、「幸福寿命」というコンセプトが登場している。これは、「死ぬ瞬間までしあわせな一生を」との考えで、慶應義塾大学の伊藤裕教授によって提唱された。生物学的な生命寿命、医学的な健康寿命、社会的な幸福寿命、これら三者が一致する、それが、人生の理想であるにちがいない。「生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごす」には、健康寿命の延伸に幸福寿命の延伸が伴わなければならないと、すると、必然的に、ライフサイエンス、ソーシャルサイエンス両者の協同が求められる。また、幼少期の養育から、青年期の学び、さらには、壮・老年期の学び直し・学び足しに至る、生涯を通じた学修も重要な軸となる。この意味で、次項に述べる、貴機構を構成するヒューマンライフイノベーション研究所と人間発達教育科学研究所の transdisciplinary な連携が強化され、実績も上がりつつあることは高く評価されると思う。

## 2) 融合研究に関する意見、提言

- ・中間評価において、両研究所の融合的な研究を期待する声があったこと、また海外機関とのさらなる連携を求める声があったことは了解した。まず、ヒューマンライフイノベーション研究所に関しては、ムーンショット計画のような大きなプロジェクトを持っていることを考えれば、学外機関との連携について、積極的な能動性を発揮していることは明らかであろう。一方、人間発達教育科学研究所に関しては、研究と実践とが強く結びついている領域であり、共同研究の相手を求めてあちこち手を伸ばすことが本来の姿とは必ずしも言えないのではないだろうか。教育や臨床医療は「イノベーション」の枠で捉えられない面があるように思う。
- ・これまで多くの「文理融合」を掲げているのを見てきたが、実質的な融合は非常に難しいというのが現状である。その点、本機構の実績から判断するに、かなり実質的に融合がなされた研究が遂行されていると思われる。共著として両分野の研究者名が並ぶ投稿論文の存在が、実質的な融合研究が行われた証拠になると思うが、そのような論文実績が複数あるのは非常に高く評価できる。文理の融合した研究であることが強調できるように、例えば、研究業績一覧において、両分野の著者を色分けして示し、一つの論文に両分野の著者が共著となっていることが一目瞭然となるような業績の示し方をすると、融合度合いを示すのにわかりやすいのではないかと思う。懸念される点としては、どちらかの分野が主となり、他方の分野がその補助的な役割となりがちな偏った傾向の融合形態となっていないかということである。どちらも主となるパターンが満遍なく存在することが望まれると思う。
- ・機構における文理融合型共同研究として、「女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究-本学学部学生を対象としたパネル調査から-」（2018年度採択）、「発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析」（2020年度採択）が実施されている。いずれも二つの研究所の連携による心身の健康の創出を目指す研究であり、前者では大学生を対象とした心身の健康や生活習慣等の調査を踏まえ、栄養学・心理学的な知見にもとづく教育プログラムの開発が行われた。後者では発達障害をテーマとする細胞レベルの研究や感情理解、感覚異常等の心理学的研究が行われ、発達障害に関わる要因、その

現れ方の多層性に対する理解が深まった。いずれも文理融合のアプローチにより、当該のトピックにおいて新しい地平を切り開くことができたと思われる。

提言としては、今後も、例えば栄養学のトピックを心理学の研究課題として取り上げ、細胞の定量的な振る舞いと行動科学的な指標との関連性を追求などして、融合領域独自の課題・問題を設定し、そのような研究を支える交流を持続的に行うことで、文理融合の意義をさらに深めていかれることを期待する。また、成果の発信・社会実装から得られるフィードバックを新たな研究課題として取り入れていくことで、スパイラルな発展が見込まれると思う。そして、このような融合領域に若手研究者や、例えば、ダブルディグリープログラムなどを通して大学院生を招き入れることで、さらなる融合の拡充が図られると推察する。

- ・「(1) 機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価」で述べたように、機構内の2研究所の融合研究は、歩み始めたところと理解している。お互いの研究内容を紹介しあうセミナーなどを機構内で定期的に持ち、お互いに寄与できることを探索する作業もあってよいように思われる。ときには、学外者にも参加してもらい、意見を聞くのもよいかもしれない。開始されているプロジェクトにおいても、協働できる余地はあると思われる。

例えば、ムーンショット型農林水産研究開発事業の代表機関となつての『誰も飢えさせない』プロジェクトが該当する。その研究成果は大いに期待される場所であるが、一方、昆虫食には、心理的抵抗感を持つ人は少なくなく、そうした心のバリアーへの対応に関する研究も併行することが望ましい。その点に IEHD が協働できることはあるように思われる。また、「脳の健康維持に及ぼす食の科学的・実践的アプローチ」プロジェクトは、高齢者の低栄養問題を生命科学分野から検討しようとしていると解されるが、高齢者が低栄養となる背景にはさまざまな心理社会的要因も関係しているとされており、IHLLI と IEHD が協働できる点があると思われる。さらには、高齢者の低栄養は女性で多いことが知られており、女性に多い理由とその予防対策まで進めることができれば、まさしくお茶の水女子大学の研究機関として大きな役割を果たすことができると思われる。

- ・ 中間評価の際には、文理融合研究の不足について指摘されているが、最終報告では、二つの共同研究が報告されている。中間評価の際には、機構全体としてのまとまりが感じられないと言う意見もあったが、実際に実験科学と調査研究の接点を見出すことは簡単なことではなく、その取り組みは評価すべきである。文理融合研究の進め方の開拓という側面からも、このような取り組みを通して得るものは大きいと思う。今後、継続的な取り組みによりさらに深く融合した研究が行われ、文と理とで共同研究することによる意義を示すことを期待している。
- ・ 研究所内の共同研究としては、ヒューマンライフイノベーション研究所における生化・代謝学部門と栄養科学部門の「脳の健康維持に及ぼす食の科学的・実践的アプローチ」、糖鎖科学部門と遺伝学部門の「腸内フローラ形成に関わる宿主因子の検証と新たな in vitro 腸内細菌培養法の開発」など今後の展開が期待される。「こころとからだのサイエンス」を標榜する貴機構であるから、二つの研究所間の連携および融合研究が切に望まれる。本事業の期間内に行われた取り組みとしては、文理融合学内科研とその研究発表会、融合研究の実績としては、秋篠宮紀子特別招聘研究員ほかの人間発達教育科学研究所メンバーと神原容子特任助教ほかのヒューマンライフイノベーション研究所メンバーの共著としての『Q & A シリーズ 炎症・感染症』の刊行、日本健康心理学会第34回大会企画シンポジウム「食

行動と心身の健康—心身医学・心理学・栄養学からのアプローチ—の開催などが、transdisciplinary な連携の萌芽として高く評価される。

### 3) 今後の課題についての提言

- ・「Q&Aシリーズ」のような啓蒙活動は意義があると考えますが、シンポジウムの開催などほどの程度有効なのかがわかりにくい。研究成果の公開ならば、専門の学会等で発表すればよいようにも思う。また、「イノベーション」に重点を置くのであれば、企業向けの周知イベント的なものがあればよいのかとも思う。あるいは、教育や医療関係のことであれば、教員や保育関係者、臨床心理士などを対象にしたセミナーの方が有効であるかもしれない（そうした職種の人にはなかなかセミナーに出席もできないと思うが）。

イベント類については、誰に何を伝えるためのものなのかが、もう少しはっきりした方がよいのではないか。大型プロジェクトの「キックオフシンポジウム」の類いは、何かのセレモニー的な意味合いがあるのかもしれないが、当方の属する領域では見かけない習慣である。

- ・次年度からヒューマンライフイノベーションからヒューマンライフサイエンスへ名称変更するという理由が明確ではない。個人的には主眼を「研究技術開発」から「利用・応用」へと移すという意味ではないかと思うのだが、異なる狙いがあるとすれば、その狙いを明確に示してもらいたい。イノベーション（技術革新）の実績としては、論文数や特許数が目標としてわかりやすい。しかしライフサイエンスの実績として、何を具体的に目指すのか、という目標設定に関わる問題である。第4期の計画として、これまで得られてきた知見を活かし、「実用的アウトカムを目指した実装研究を進める」という設定は大変良いと思うのだが、何を評価軸とするのか、その設定を明確にされると良いと思う。
- ・今後に向けた提言としては、本機構の目的の一つである「成果の社会に向けた発信」に関し、Q&Aシリーズを英語や中国語などに翻訳し、web ページに掲載すること、また、研究の進展に応じて、一定期間ごとにアップデートしていくことなどが期待される。また、同じく、目的の一つである「国内外の研究機関や企業との連携、文理融合研究の推進」に関しては、機関間のより密な交流や、研究者・学生の相互受け入れ、上述のようなダブルディグリープログラムなどを通じた、複数の分野に卓越した研究者の輩出が望まれる。そうすることで、さらなる連携、融合的な研究の推進や、成果のアウトリーチ・社会実装を可能にするサイエンス・コミュニケーターなどの育成が可能になると思われる。

なお、国際拠点としてのさらなる発展を目指すには、外国人研究者や学生の受け入れの拡大が有効かもしれない。HLI 研究所の構成メンバー比率を見ると、女性比率は5割、若手比率が1-2割であるのに対し、外国人比率は2-4%となっている。外国人（特に若手）比率の目標値を決め、達成に向けて検討していくことで、さらなる発展が見込まれると思われる。パンデミックにより対面による国際交流が困難である一方で、インターネットを介した交流はむしろ容易になっているように思われ、こういう点も利用できるかもしれない。

- ・機構における最も大きな課題の一つは、設置2研究所の役割分担の整理と思われる。言うまでもないことではあるが、文理融合は人文系と理系の研究領域を単に一緒にすればできるものではない。共通の目的とその目的に寄与できる研究分野の融合でなければ、うまくいかないことは、多くの大学で経験してきていることである。「(2) 融合研究に関する意見、提言」で述べたような、2研究所間の情報交換の場の設定、さらには、2研究所に留まらず、学内の研究者からのリクルートも含めて文理融合型研究の推進が求められている

ように思われる。

国際的な研究拠点構築の課題も大きいと思われる。海外の研究者との交流は見られているが、共同研究まで発展しその成果を発表する段階までは至っていないように感じられる。海外との研究交流、特に若手の研究者の派遣と海外からの受け入れを推進する制度を構築し、コロナ禍が収束したあとに実施できる体制作りを今から考えるとよいと思われる。

- ・今後の課題としては、文系と理系が近くに存在するお茶の水女子大学ならではの取り組みである文理融合研究の発展に期待している。また、国際活動については、コロナ禍終息後の発展に期待している。
- ・かつて感染症が中心であった子どもの疾病構造は、いまや非感染性疾患が中心となり、虐待、肥満、心身症、発達障害、アレルギー、不登校、不慮の事故などがふえてきている。かつて Battered Child Syndrome という疾病をはじめて知ったとき、日本には対応する用語さえなく、遠い外国のできごとと思ったものだった。しかし、今日では、わが国のどこにも起りうる日常の問題となっている。虐待のみならず、どの非感染性疾患にも、さまざまな外因あるいは環境要因が関わっている。したがって、発達段階に即した心身の健康と環境の向上をめざす貴機構とその活動は、学術的および社会的な意義と価値を増しはすれ減ずることにはないと考えられる。とりわけ、(1) 二つの研究所が協同して行う教育学および生命科学両面からの多角的なアプローチと、(2) 長期にわたる prospective な study が重要である。後者に関しては、たとえば、「小さく産んで大きく育てる」のは必ずしも正しくなかった、栄養不良だった胎児は成人すると 2 型糖尿病やメタボリック症候群を発症しやすい、といったイギリスからのレポートなどが参考になると思う。

#### 4) その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

- ・学問は「人のために役立つ」ものばかりではないと思う。先生方・学生さんの研究の価値を評価するのに、「～に役立つ」ということをそんなに強調しなくてもよいのではないだろうか。当方の属する人文科学の世界から見ると、やや違和感を覚える場面があった。
- ・本機構においてはお茶大ならではの取り組みを重視されていると思う。女性ならではの視点は勿論だが、附属学校園との連携を規模的に考えてもこれほど密接に行える研究教育機関は珍しいと思われる。これまで人間発達教育科学研究所においては、その利点を十分に活用し、今後も活用するという計画とされているのは良いと思う。一方でヒューマンライフイノベーション研究所側では、この利点を活用しきれていない感がある。勿論、研究分野として活用しにくい面があることは重々承知しているが、上記、「(3) 今後の課題についての提言」の記述にも関わり、今後「実装研究を進める」ということであれば、その実装の場として附属学校園との連携を活用することは可能であると思われ、「お茶大ならではの」のライフサイエンス研究となれば良いと期待する。
- ・中間評価における意見、提言にも丁寧に対応され、国際的教育研究拠点形成、国際連携、研究テーマ、人材育成、情報発信、お茶大ならではの取り組み等について、真摯に取り組まれていることも確認した。「からだ」と「こころ」、「幼児期から高齢期までの発達に則した生活環境」は、先端研究と社会実装をつなぐ、ますます重要な領域となると思う。5 年半にわたる取組みをさらに持続的に深化、拡張、更新していかれることを期待する。
- ・ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的は、「生命科学」と「成長・発達に関する科学」の知の融合と、得られた知を基に健康で活力のある生活を送るための支援方法の開発(イノベーション)ということができるよう感じている。そのように考えた場合、

IHLI のサイトで掲げられている『健やかで活力ある人生を作る「こころ」と「からだ」の健康イノベーション創出』の表現は、少し違和感を覚えるところがある。「こころ」と「からだ」を入れ替え、『健やかで活力ある人生を作る「からだ」と「こころ」の健康イノベーション創出』ではどうだろうか。「からだ」の解明はメカニズム（機序）の解明であり、「こころ」の解明はコンテンツ（内容・人が生きてきた歴史）の解明と考えるからである。どちらも不可分であるが、身体がなければ心は成り立たない。IHLI の研究分野を考えると、IHLI は、こころを考えるためにもからだが大切であることをもっと打ち出してもよいのではないだろうか。

- Q&A シリーズの冊子は、2 研究所の研究成果を社会に発進する意味でも評価できる成果物と思われる。一方で、評価委員会の時にも述べたが、この冊子を小学校、中学校の児童生徒の教育に活用するには、このままでは表現、内容とも難しいと思われる。小学校、中学校の教育にも活用することを考えているのであれば、附属学校園の先生方と協働した教材作成を行うのがよいと思われる。
- ASD 女兒だけのグループ活動「あまなつ茶あむ」は、女性の発達障害が注目されている現状から、タイムリーな活動と思われる。一方、女性の発達障害の人たちは、青年期以降に気づかれ、あるいは、問題が顕在化し、悩むことも少なくないことがいわれている。特に、女性の ASD では、青年期以降に自殺企図が多いことが指摘されており、青年期における精神的支えの重要性がいわれている。このようなことから、是非、青年期の女性 ASD の人を対象とした支援活動（研究に結びつけて）を考えていただきたい。
- 質問にもでていたが、冊子の利用についてもっと宣伝をしたらよいと思う。ネット上では信用できない情報が流れている中、それぞれの分野の専門の先生からの分かりやすい解説が載せられており、もっと世の中に出したらよいと思った。本が固く（物理的に）開きにくく、表紙が硬く（デザイン的に）手に取りにくいように感じられたので、装丁を工夫すると良いと思う。また、どのような人向けなのか、「〇〇の基本を知りたい方へ」などの情報を入れるのも手に取りやすくなるかと思った。
- ヒューマンライフイノベーション研究所では、海外との共同研究は、2021 年より再び増加傾向にあるものの、依然特定の一部教員に限られており、また、ほとんどの共同研究は未だ国際共著論文への結実に至っていないように見うけられる。2050 年までを視野に入れた「ムーンショットプロジェクト」は真にすばらしいと思うが、SDGs を冠に掲げる諸研究は、SDGs の一部の Goals の「つまみ食い」、「いいとこ取り」の感なきにしもあらず、2030 年までの約束ごとである SDGs のさらに先を見据えた中長期的な視点やグローバルな展開への意欲、ビジョンに乏しいように思われる。
- 人間発達教育科学研究所では、第 1-2 期にはスリランカ児童を対象とした研究、7 カ国をフィールドとした研究、国際メタアナリシスなど目を引くものがあつた。第 3 期では、COVID-19 パンデミックが autism (Kamio ほか)、eating disorder risk and symptoms (Omori ほか)、food waste (Omori ほか) におよぼした影響に関する研究が光る。「国際的な研究・教育活動」を謳う貴機構だが、「国際的な拠点形成」に至るには、さらに、峰を高くし、かつ、すそ野をひろげる努力が必要かと思われる。



## 5 最終評価総括および今後の課題

今回、中間評価での進捗状況の報告を受け、ご意見や改善点にも対応するとともに長期（6年間）にわたる取り組みについて、評価をいただいたところである。

途中、コロナ渦により協働活動の進捗が妨げられたが、その中においても高い評価を受けるに至る活動を行えたことは、今後のヒューマンライフィノベーション開発研究機構に設置した2つの研究所（ヒューマンライフィノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）の研究プロジェクトや事業実施において、大変有意義なものであったと考える。

特に、6冊のQ&Aシリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると自負している。

上記により、本学における第3期中期計画・中期目標の達成にも大いに貢献できたと確信し、今年度から開始となった第4期中期目標・中期計画においても文理融合型の研究活動を推進し、国際研究拠点の構築に向けた取り組みを行うことにより、本学の国際化をリードする機構を目指していく所存である。

最後に、今回の最終評価に際して、大変多忙なスケジュールの合間を縫って、最終評価にご協力いただいた全ての委員に対し、深く感謝の意を申し上げます。

(第三期中期計画項目 (抜粋))

○研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所)を新設し、国際的に評価される研究成果を世界に発信する拠点として、人が生涯を通じて健康で心豊かに過ごすための研究・開発、乳幼児教育・保育の実践研究、人間発達基礎研究、養育環境と子供の発達に関する長期追跡研究や発達臨床支援研究、防災・減災を含む安全・安心な社会環境構築のための研究・開発を行う。【K17】(戦略性が高く意欲的な計画)

○教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所)を新設し、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための世界水準の研究拠点を構築する。【K47】(戦略性が高く意欲的な計画)

お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構外部評価の観点

1. 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価
2. 融合研究に関する意見、提言
3. 今後の課題についての提言
4. その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

(参考)

(ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的)

人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、お茶の水女子大学におけるこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行う。

(ヒューマンライフイノベーション研究所の目的)

人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築のためのイノベーションを創出する国際研究拠点を構築するとともに、成果に基づいた教育プログラムを策定し社会に還元する。

(人間発達教育科学研究所の目的)

人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査を行い、国際研究拠点を構築することを目的とする。

国立大学法人お茶の水女子大学  
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構評価委員会

2022年2月17日現在

氏名	役職	根拠規定
浅田 徹	基幹研究院長	第3条第3項
大瀧 雅寛	基幹研究院自然科学系 教授 (その他学長が必要と認めたもの)	第3条第5項
矢島 知子	基幹研究院自然科学系 教授 (その他学長が必要と認めたもの)	第3条第5項
山本 博	公立小松大学長 (外部有識者)	第3条第5項
宮本 信也	白百合女子大学 副学長 (外部有識者)	第3条第5項
仲真 紀子	立命館大学総合心理学部 教授 (外部有識者)	第3条第5項

### <最終評価報告のスケジュール>

- |            |   |
|------------|---|
| 2021年6月23日 | 第1回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議<br>最終評価（国際シンポジウム含む）実施について検討開始（日程、プログラム、評価委員案等） |
| 9月24日      | 第2回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議<br>日程、プログラム、評価委員の確認、決定                         |
| 11月30日     | 第3回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議<br>評価日程、開催方法、コメント票等の確認・検討<br>外部評価委員候補者への打診・内諾  |
| 12月        | 外部評価委員に対する委嘱手続き   |
| 2022年2月中旬  | 評価委員会開催通知、資料送付  |
| 3月14日      | 午前：国際シンポジウム開催（オンライン）<br>午後：評価委員会開催（オンライン）                                 |
| 3月31日      | 評価委員コメント票提出締切   |
| 4月         | 各評価委員よりコメント票回収・とりまとめ  |
| 5月9日       | ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議<br>最終評価実施報告書（案）及び最終報告書（案）の検討                      |
| 7月12日      | 最終評価実施報告書の学内報告  |
| 7月中旬       | 最終評価報告書、最終報告書の公表（ウェブページ等）   |